



標註枕草紙讀本

二

特別
イ 4
3163
214(2)





貴  
14  
3163  
244(2)



標註枕草紙讀本卷二



佐々木弘綱標註

木の花ハ 三十二段

詠ふの法よか  
くららんハ新  
古今なく所を  
えやハ忍バぬ  
子規もらうの  
まのがげよハ

梅のこくも薄くもこつりむい。梅の花びらおなき  
子。紫いろこつきぢ。枝細くて咲くうら。藤の花志まひ  
長く。色よく咲そらいとめでうら。うの花ハ不お  
とりて何とすけれど。咲比のをうら。杜宇の法  
お隠らんをか。紫の帰きに。空性のうら。うら  
きあやしの家どもおどろある垣縁うどよ。いと  
ゆる。咲うらうら。うら。うら。青色の上よ。白きハ

枕草紙卷二



くれて。  
抄み、梅のこく  
まきふとある  
いんやうねい  
一本をよめて、紫  
のいとこく、と  
四字を福とす。  
抄云、梨花、花  
よ、貴きれど、  
我れよ、い、梅、梅  
有どやうふい、  
むとあそびね  
ば、こゝして、詩を  
どあもれふよ  
能らね、ば、文つ  
けちど、だよ、せ  
ずと、いつるよ

とへぎさぬかづきつる。青らち紫をどふかよひ  
ていとをかし。四月のつごもり。五月のついでち  
なごのほわひ。梅の紫のいとこく。まきふ。花のい  
と白く咲こつふ。雨のふりつるつとめてなごい。  
よにぞく心あるまふをさう。花の中よりみの  
大ぐねのまうと見え。いみじくきい。やかよ見  
えたらふど。新嘉よ。ぬまたる。梅もおとくす。新  
公のよまがとく人。おへばよ。や。猶更ふ。いふべき  
もあ。あ。む。な。の。花。よ。ふ。さ。さ。う。あ。や。き  
物あして。めふちかく。なる。新嘉。文つけ。ごふせ。ず。  
あ。い。ぎ。ぬ。う。お。ら。れ。た。る。人。の。顔。を。ど。見。て。い。た。と

やとあり。  
あいなく、い、何  
の候か、う、陰  
もな、く、ま、ま  
ト、ら、又、由、る、ま  
なり。  
美隆云、中昔の  
物語、文、を、ど、ふ  
詩の句を引た  
る、い、多、く、い、こ  
と、ば、よ、み、よ、て、  
音、讀、い、を、く、る  
し、れ、れ、ば、こ、う  
も、一、枝、い、ひ、と  
え、ど、と、よ、む、べ  
く、や、梨、花、い、る  
讀、ま、る、べ、し。

ひふりよも。まふ。其を。より。して。あいな。く。ん。ゆる  
を。ま。ろ。う。ふ。限。ま。き。物。よ。て。文。も。も。能。る。ま。う。を。  
う。り。も。も。あ。る。や。う。あ。ら。ん。と。て。せ。あ。て。見。ま。ば。花  
び。ら。め。ら。い。ふ。を。う。き。う。あ。ひ。こ。を。ん。も。も。れ。く  
つき。た。め。れ。揚。き。妃。み。う。どの。新。使。小。逢。て。泣。け。ら  
新。小。似。せ。て。梨花。一。枝。春。雨。を。お。び。う。り。ね。ど。い。ひ  
た。ら。い。お。げ。ら。け。あ。ら。と。思。ふ。よ。猶。い。み。ど。う。め  
で。し。き。事。い。た。ぐ。い。あ。ら。と。お。ぼ。え。う。り。桐。の。花  
紫。よ。ま。ま。きた。ら。ハ。猶。を。う。き。を。紫。の。いろ。づ。り。さ  
ま。う。つ。て。あ。ま。さ。ど。も。又。こ。と。木。ど。も。と。ひ。と。う。い  
ふ。べ。き。ふ。あ。ら。む。も。ろ。う。こ。う。と。ぐ。し。き。名。つ。き



夜ふよらうら  
しき名つき  
るるハ風凰の  
あふちハ俗  
せんどんの本  
かつまこの池  
ハ奈西の奈  
葉師ちの池を  
いひつゝんた  
りとぞ。

たつちのぐれりも恒らんふことなりまして  
琴ふつらりてさまぐなる縁の出くらをどを  
うしとハ世の常ふいふべくやハあるいみどら  
こそハめでつけま。本のさまぞよらげなれど。  
あふちの花いとをうがれをよさまこうとにさ  
きてかろげ五月お日お河ふもをうし。  
池ハ 三十三段  
かつまこの池。いそれの池。おへの池。まら  
ぬよまありふ水鳥のひまなくまさまごうが。  
いとをうしんええなり。水鳥の池あや志  
うをどてつけるなるといひしうバ。五月を

あなりつけ  
後云み、な  
の池をほみ  
みづるしと特  
どてつふよや  
猿澤の池。采  
女の帝ハ寵愛  
おとろへしを  
恨中て。身をな  
げとらる。拾遺  
集。大和物語な  
どよみえうり  
おまへの池。恒  
吉の神奈の池  
をおまへの池  
といへる。

どまて。雨いこふらんとまら幸ハ此池よお  
とつおおあくちんある。又目のいみどく照る幸  
ハ。春の始よ水るん多く出るといひなり。むげ  
ふなくかわきてあらばこそまもつけぬ。出る折  
もあつちるをひとまらおつけらるれと。いら  
へまほり。あさし。猿沢の池。采女の身をさげ奉  
るをまごうめして。新幸など有らんこそいみど  
うめでたくれ。縁うれ髪をとく花がよみらん  
など。いふもおらなり。おまへの池。又何の心  
おつけるなるとをうし。かづみの池。さや  
まの池。みらりとつお歌のをうくおおゆらに



さやまの池。六  
帖。むささる。  
さやまの池の  
みくりこそひ  
けばとえすれ  
とまやたえす  
る。  
原の池。玉藻ハ  
なつりそのか  
ハ。風俗上野分  
よ見えたり。

菜玉ハ。續余儀  
ともいへり。他  
花の中ふ蕙物

やあ〜ん。らひぬまの池。け〜れ池。玉藻ハな  
うりそとつひ〜んをか〜。まささの池。

せちハ 三十四段

五月ふ志くハ。さうぶ蓬をどのかをりあひ  
たつも。い〜どらうをう〜。九重の内をさ〜めて。  
い〜らぬ民のをみうまで。い〜でわがむこに志げ  
くふ〜んとふきわさ〜る。猶いとめづら〜く。  
いつ〜うとをりハ。さ〜志〜る。宮のり〜きあ  
曇り降りたつよ。后の交るどふハ。ぬひどのより  
御楽玉とて。い〜くの糸を紐〜げてまら〜る。これ  
なみちやうた〜てたつもやの柱の左右ふつ〜と

を入れて。糸もて  
かざり〜るも  
のなり。  
抄ハ。みちやう  
とてまつる。と  
ある。い〜るし。  
一本よ。とて〜  
るとある。う〜  
よろ〜。

村濃ハ。むらあ  
り〜。あそふこ  
こ。こき紐糸を  
もて。ゆひつ〜  
るなり。  
よろ〜うとふ  
物云。大〜こふ

り。九月九日の葉を。あねとす〜のきぬよ。つ〜  
み〜す。あら〜せたつ。同〜柱ふゆひつけ〜。月比あ  
る。葉玉とりう〜へてすつある。又葉玉と菊のをり  
す。であるべきよ。やあら〜ん。されどそれハ。皆いと  
を引とりて。抱ゆひな〜して志〜もる。御せ  
くす。あ〜。わ〜きん〜。い〜さ〜うぶのさ〜。い〜。  
もの。い〜みつけき〜して。さ〜ま〜ぐからぎぬが〜み  
長き糸をう〜きををり。枝ども。村濃の紐〜して結ひ  
つけを〜したつ。わ〜づら〜うい〜ふべき。み〜らね  
どい〜をか〜。さ〜て。甚〜ご〜に。嘆とて。襦をよろ〜  
うとふ人。や〜ある。つ〜あり〜。い〜べの。や〜ど



あふ人いあふ  
ドなり。  
つねよ。こゝい。  
イチヅニとい  
ふをあり。  
そむえさるハ  
今も大の予ダ  
そむえら。と俗  
おつよよ同ト。  
たをれとら小  
舎人之山家集。  
物ものひらけ  
ちむる。楯よ  
り。そむえて風  
の透るちり哉。  
とあるも。同ト  
こゝろなり。

ねどふつけてハ。いみじきつとさうと。つねふ  
たつ中をまもり。人ふんら〜べえもつとすら  
ありとあひい〜るを。そばえ〜るこどねり〜ハ  
なごふ。ひきと〜るまてた〜もをう〜。紫の紙よあ  
ふちの花青き紙よ〜るぶの紫布をうまきてひ  
きゆひ。又白き布を。糸あ〜てゆひ〜るまをう〜。  
いと長き根をど。文のありふ〜れをど〜たる人  
どもやども。いとえんちるか〜りごとか〜んと  
いひ合せ。語らふどち〜んせあ〜せなと〜るを  
う〜。人のむきあ。やむ〜となきふ〜。伊又きこ  
えぬふ人も。さふ〜ハ心〜とふぞ。なまめ〜うを

やるぎ。かきと  
抄あり。季吟  
云。柳の字柳の  
字よまがいた  
るゆゑよ。云い  
とある如く。柳  
ハ柳の字。こ  
そのハの本。蜻蛉  
日記よ。そとの  
お祭のちまど  
ア〜る枝よつ  
けて。夏山の本  
下家の。深々れ  
バ。かつぞをげ

か〜きだぐれ。のねどふ。部公の名のり志〜るも。  
ま〜るをう〜ういみじ。  
木ハ 三十五段  
かつら。ごえふ。やなぎ。たぢばな。そむの  
本。〜たなきこ〜ちまれども。花の本どもお  
を〜。お〜なべた〜る緑よ成た〜中ハ。時〜か  
びこき紅紫のつやめきて。思ひ〜けぬ青紫の中  
より。〜出〜るめ〜る。まゆみ。〜ふもい〜  
を。そのお〜もな〜けまど。やどり木と〜ふ名い  
とあ〜れ〜。さうき。臨時の祭。諸神樂の折など  
いとを〜。よふ木ども〜をあれ。神の西前れお



きの色もえよ  
けさ

ふけいづみち  
る。志の田の杜  
の楠の本の子  
えよこりて。  
物をこそぞん

五月。光房云。  
まほの。とあり  
を。五月と誤れ  
るるるべし。は  
後よろし。五月  
よてハ。ええ分  
がし。

といひし。めろんも。どり。まきをうし。くらまの  
本ハ。ころも多かる。不ふも。らとふま。しらひ。そ  
ら。け。ゆ。く。し。き。け。ひ。やり。な。どう。と。ま。し。き  
を。ち。え。ふ。う。れ。て。急。ま。る。く。の。た。め。し。よ。い。し。れ。さ  
る。ぞ。た。れ。う。は。殺。を。あ。り。て。つ。ひ。も。ど。め。ろ。ん。と。た  
も。ふ。よ。を。の。し。ひ。の。本。人。ち。か。ら。ぬ。お。る。れ。ど。  
み。つ。ば。よ。つ。む。の。殿。づ。くり。も。を。か。し。五。月。よ。雨。の  
こ。ゑ。ま。ね。づ。らん。も。を。う。し。か。へ。で。の。本。さ。し  
や。う。なる。あ。も。も。え。出。る。梢。の。赤。み。て。お。る。ど。か  
た。ふ。ろ。し。ひ。ろ。ご。う。る。葉。の。さ。ま。花。も。い。と。ば。り  
れ。だ。ふ。て。虫。を。ど。の。か。れ。る。や。う。ふ。て。を。う。し。

あぢきなきハ。  
ウトマシイ。ラ  
千モナイ。とい  
ふ。ころ。あり。  
かねごとハ。マ  
へヤクソク。く

志らがり云く。

あまハひの本。世ちうくも。ええきこえむ。みた  
け。ふ。ま。う。で。か。へ。る。人。など。志。の。む。て。あり。く。め  
る。枝。ぎ。し。な。ど。の。いと。ち。ふ。ま。ふ。く。げ。よ。あ。ろ。く。志  
け。ま。ど。何。の。心。あり。て。あ。ま。ハ。ひ。の。本。と。つ。け。ろ。ん。  
あ。ぢ。き。な。ね。か。ね。ご。と。なり。や。た。れ。ふ。し。め。た。る  
ふ。う。あ。ろ。ん。と。志。ふ。ふ。志。く。ま。ほ。し。う。を。う。し。祿  
ど。ま。ち。の。本。人。を。み。く。る。る。べき。さ。ま。み。も。あ。ら。ね  
ど。葉。の。い。み。ど。う。こ。ま。う。み。ち。ひ。さ。き。が。を。う。し。き  
なり。あ。ふ。ち。の。本。や。ま。な。し。の。本。椎。の。本。ハ。  
とき。ハ。本。ハ。つ。ま。も。ある。を。そ。れ。も。葉。が。へ。せ  
ぬ。た。め。し。み。い。を。れ。る。も。を。う。し。志。ら。が。り。な。ど



後云は一  
もべてとき  
さきころり  
拾遺集よ人丸  
三引の山路も  
あふは白樹の  
校よも葉よも  
雪のふれ、バ  
つふりよても  
をりよつけて  
も、こころり別  
のりあり、こ  
ふハ似つうは  
滑乱しころる  
るべし。

つふものまゝしてみ山本の中ふもいとけどなく  
て。三位二位のうへのきぬそむるをりなるもぞ。  
葉をぶふ人れんるめでたき事をうききり  
よとりつづべくもあらねど。つつとなく雪のふ  
りたるふんまぐへられて。まこのをのみうらめ  
出雲の國よおろしける西子を思ひて。人れがよ  
みうる歌などを見ら。いみじうあそれく。つふ  
りよてもおろよつけても。ひとかきあそれともを  
うきともきくおきつる物ハ草も本も鳥虫も。お  
ろくふこそおがえぬ。ゆづり葉のつみどろふ  
さやうふつやめきくる。いと青う清げなるふ

六帖をび人ふ  
宿かすが世の  
ゆづり葉の。お  
葉せん世や君  
を日を思ん  
後程。柏木よ葉  
きの神のま  
ころるを。あつで  
そおし。たろり  
なころる。

思ひがけぞ似るべくもあらねど。きよの赤うきら  
くさうみえうらこそ。いやくれどもをうけ  
れるべての月比ハ。露もんえぬ物の志をまのつ  
ごもりふも時めきて。なき人のくらひ物よも志  
くよやとあそれをるふ。又よをひのふるはぐこ  
めの具ふも志てつうひたある。いりなるふり  
お葉せん世や。といひなるもたのめ。かして  
本。いとをう。葉きの神のまきんも。いとか  
う。又。漸の督佐尉などを。つらんもをう。  
まぐ。なれど。まろの本。か。羅めきて。まろき  
家の物といええむ。



鳥ハ 三十六段

みこも。傍に云。去とぐのりるらん。鶴の字より。おしあてよ。さもいへるか。巫をバみこといへばるり。

去とぐのりるれど。あふむいとあまれなり。人のみこも。ひこ。ひこた。山鳥ハ。友をこひてな。くは。境を見せしむるくさむらんいとあまれ。谷へぞてたる経をどいと心をもる。鶴ハ。こちさきさよなれども。鳴聲。雲あまぞゆらんいとめで。かいら。赤き雀ハ。かるがのをとり。たぐみ鳥。鶯ハ。いとるめもんぐさ。おるこ。みるとも。うさてよろづおなつ。かくねど。ゆ。るぎの森おひとりハ。祿とあらしふらんこそ

りハ。ねと。あらしふ。おを。六帖。おねの上の。雲おさふ。友をるみ。さ。のひとりね。さ。るぞ。び。き。

をう。くれ。まこも。水鳥ハ。を。いとあまれ。あり。か。さ。み。よ。み。か。さ。り。て。お。ね。の。上。の。雲。を。拂。ふ。らん。など。いと。を。う。都。鳥。川。子。鳥。ハ。友。ま。ど。ま。は。む。む。こ。も。鳥。の。声。ハ。遠。く。き。こ。え。る。あ。ハ。れ。なり。鶯。ハ。ま。ね。の。雲。お。拂。ふ。ん。と。あ。ふ。ま。を。う。ハ。鶯。ハ。ふ。み。る。ど。お。も。め。で。た。き。お。よ。つ。ら。り。鳥。よ。り。を。め。て。さ。ま。う。こ。ち。も。さ。さ。を。か。り。あ。て。よ。う。つ。つ。し。き。ほ。ど。よ。り。ハ。九。重。の。う。ち。お。な。る。ぬ。ぞ。いと。さ。る。き。人。の。さ。な。ん。あ。る。と。い。ひ。を。さ。さ。し。も。あ。ら。し。と。お。ひ。ふ。十。年。を。う。り。さ。ぶ。ら。ひ。て。聞。し。み。お。の。こ。と。に。さ。さ。み。た。と。も。せ。ざ。り。き。さ。さ。ハ。妹。も。

九重の内よ。唱ぬ。抄云。是。法。少。の中。云。お。侍。し。比。る。ど。自。然。唱。ざ。り。る。る。づ。し。必。内。裏。よ。る。

九重の内よ。唱ぬ。抄云。是。法。少。の中。云。お。侍。し。比。る。ど。自。然。唱。ざ。り。る。る。づ。し。必。内。裏。よ。る。



うねいあ  
ず云とあり  
とよる

今いかにせ  
んい抄子天性  
さやう子生付  
これバせんか  
さるいと  
むしくひい別  
香の名よて鶯  
の葉名よいあ  
らず

ちうく紅梅もいとよくかよひぬべきさような  
りかしまうでつきけいあやしき家の見所もな  
ぎ梅をどよの花やうにぞなくよるなりぬもい  
きたあきこちをれども今いいうせん其秋  
の末まで老翁よ唱てむしひるどようもあ  
ぬも此の名をつけりていふぞちをしくは  
ごきこちをるそまも雀などのやうに考よあ  
るもすらバいもおぼゆまぎまきくゆいこそハ  
あうぬ年をちうへるなごをきこことふ歌ふ  
もふみふもつくるるハ猶喜のうちすらま  
うばいふをうからましく人を人げなうせ

そりやハ十  
ろんそりか  
いそしりハせ  
ぬとあり

平林院抄云空  
性子今うちあ  
とつあふそは  
けあり  
知豆院拾芥抄  
子千葉外建立  
云とあり

のねがえあまづさうさうさあよるをバ  
そ志りやいさふとび鳥などのうついさき  
れいれなどもさる人せふやうかされをいみ  
かすべき物とありこれバとふふよ心ゆるぬこ  
ころさるなり祭のかつさるて雲林院知豆  
院などのまへ小車をたそれバ部公も志の  
ぬよあうんなくふいとようまねびふせて本  
言き本どもの中ふ法をふ唱するころをさうさ  
をかハまき部ハ猶更ふいふべきかさるい  
つしう志り類ふもきこえ歌ふお花を福を  
さふやうりをさうげさくれさるも移さげか



らうくしきハ  
俗ハ切者有  
とつふまうて  
そをほめて  
いつるなり。

あてハ上品ナ  
キヤシヤナケ  
グカイウツク  
シサウナニ  
おふハふりと

心ざんをり。五月雨のみどり秋小森覚をして。  
いうでんよりさきみきうんとまたきて秋ふの  
く打いでたる春のらうくさうあいぎやうづき  
たる。いみどり心あくがれせんうさあみを月  
み成ぬればおれもせびるぬるすべていふも  
おろなり。よるなく拍すべていづきまめでこ  
しちごどものみぞさうさあき

あてなるもの 三十五段

うす色よさうさぬのかさみ。かりのこ。け  
づりひのあまづらふいりてあさうさきかなま  
りふいりる。さあさうのず。藤の花。梅

らとあり。う  
ア。三葉一本ふ  
て。おぎをひと  
り。

契らん。秋の心  
もさうずして。  
秋風とのむみ  
の虫の春。この  
寂蓮の秋ハ。此  
葉紙ふよりて。  
詠うつて。鬼  
の子の原田ハ。  
知がう。

ぬらづきむし。

れさよ雪のふりうりる。いみどりうらうら  
くきちごのいちごたどくひうら。

蟲ハ 三十八段

秋虫。松虫。ささおり。きりぐす。蝶。われ  
から。ひをむし。螢。葉虫。いとあをれなり。鬼の  
うみくれバ。おやみ似て。これもおそろさきこ  
ちぞあんとて。おやのあしきね引きせて。今  
秋風ふらん。おろごらん。さあまてよとつひて。お  
げていよるもさうさ。風のさきうさりて。八月  
ぞうりみなれば。ちよよくとをるなげよなく。い  
みどりあそれなり。ひぐらう。ぬらづき虫。又



は虫類を定て  
れおすやう  
なればさう名  
づけらるる。

人の名よつき  
さうい列子か  
甘寝とつらん  
あればうとま  
しき名ことい  
ふえらうとま  
しりて改らう  
夏虫ハ青蛾と  
も愛とも云り  
蟻ハ一種の機

あそれさう心よ道心おらうてつきわりくら  
ん又思ひのけむらうき雨などか不どめきさう  
閉つけらるるをさういられ。 蟻こそふくき物  
のうちにひきつべくれあひぎやうなくふくき  
物ハあれんさう出づき物のやうよあらぬ  
どよろづの物お居敷などおぬまらうとてお  
たうなどよ人の名よつきさういとうとほし  
夏虫いとをうくらうのうへ飛ありくいとを  
か。 蟻ハふくけきどかろびいみどうておの  
上たどをたあゆみあうこそをうられ。

ひろね

三十九段

ことつみ説よ  
ろくかさん説  
か。つららハ  
タモキタルと  
いふ言なり。控  
おくよもはこ  
とバありあそ  
せ考ふべし。

やうく和名抄  
は車蓋を夜架  
太とよめり。  
あめう。同書  
お黄牛を阿米

七月をうりふ風めいさうふき。雨などめさうあ  
しき日大かといと涼。夕暮ハ雨もうちつら  
たるおあせのまらうか。つらきぬめうま  
き引うづきてひろねさうこそをうられ。

ふげなき物

四十段

かみあき人のふきあやめきぬさう。 志  
かみさう髪又藝つけたる。 あしきまを赤き紙  
よあさる。下まの蔽さ言のふりさう。又月れさ  
入るもいとらちをう。 月のいとあうきおあ  
うれき車おあひさう。 又さう車おあめ半うけ  
たる。 老らるもの。 腹言さう。あふさありく。



宇之とよわり  
ねまどひの  
とひのまどひ  
みねまどひ  
あひつみうら  
つみといつむ  
落推をひろふ  
を云なるべし  
柳よの推のま  
をくひうらと  
とあり  
やかうの夜行  
の字音あり  
けんぎの嫌疑  
の字音あり

又このかき男もちつるいとくさるきふことく  
のちとおゆるとをねつみうら老なる男のねま  
どひなる。又さやうふひげぐちなる男の志ひ  
つみうら。歯もなき女の梅らひてすがらうら  
げまのられなるものちまきうら。ははのそまの  
みらそあめれ。ゆげいのまけのやかう。かりぎ  
ぬ海もいとあやげなり。又人ふおぢらうら  
うへのきぬぞおどろくく。ちちまよふも  
人えつけばあまづまう。けんぎの者やあると  
まもぶれまもとぐむ。六位藏人うつのはらう  
らうらんとうちひく。せふをくきらく。まき抱ふ

つきなきのフ  
ウツリフニア  
ヒなごつふ急  
あり  
このの文をた  
とひきらく  
うらんとまけ  
あまらうら  
とおしうら  
まらとく  
念じてハシン  
ボウシテなり  
とめてハ

おぼえ置人げまなど。此世の人とごみとひ  
らざ目をぶふん合せておぢらうくく。うち  
つらりの細殿などふ恐びく入あうら。こま  
かつつきなるまき。まき抱ふらまらうら。ち  
あけちうらまの。おのり。げま。やまらう  
まらうらんとおしうら。まらうら。まらうら  
ふうへのまきぬ。まきあげ。まらうら。まらうら  
うら。おぐねかけうら。まらうら。まらうら  
のく。なる。此つらうら。まらうら。まらうら  
てより。五位の飛人も。月夜ふむ。車ありき  
なる。まらうら。まらうら。まらうら。まらうら。



る忍びありき  
ハ、せぬがよ  
らんとは。

相降するハ、二  
事斗るる児の  
何となく、ア、  
とつふを云り。  
みやすく、す。  
義隆云、ハ、朝心  
陽ぐく、ハ、抄の  
と、ハ、つう、ハ、

けしきをみハ、  
るをみきてう  
ちとけぬこ  
ろなり。

醫進ふくげある人の年おつるを、抱ぐつり  
さる人のちごむてあそびする。

細殿お 四十一段

ほそどのふ人とあまこめてありくものども、み  
やもからずよびよせて抱まどつふ、清げなる  
そのこ小令く、ハ、まどのよきつ、みぶらろ  
ふきぬどもつ、み、ハ、ぬきのこ、ハ、まどうち  
んえ、ハ、ふくろよ、ハ、ま、ハ、矢、ハ、そ、ハ、洋、ハ、そ、ハ、お  
どもせありくを、た、ハ、ど、ハ、ま、ハ、ふ、ハ、よ、ハ、つ、ハ、い、ハ、め、ハ、て、ハ、お、  
が、ハ、ど、ハ、の、ハ、こ、ハ、と、ハ、い、ハ、ひ、ハ、て、ハ、ゆ、ハ、く、ハ、そ、ハ、い、ハ、と、ハ、ま、ハ、し、ハ、げ、ハ、き、ハ、き、ハ、バ  
みや、ハ、こ、ハ、が、ハ、り、ハ、て、ハ、志、ハ、ぶ、ハ、び、ハ、と、ハ、も、ハ、つ、ハ、ひ、ハ、き、ハ、く、ハ、も、ハ、つ、ハ、き、ハ、で、

いぬるものハ、いみ、ハ、ど、ハ、う、ハ、ぞ、ハ、ふ、ハ、く、ハ、き、ハ、う、ハ、。

主殿司こそ 四十二段

とのもりづう、ハ、こ、ハ、そ、ハ、た、ハ、な、ハ、を、ハ、う、ハ、し、ハ、き、ハ、も、ハ、の、ハ、い、ハ、あ、ハ、れ。  
志も女のみ、ハ、こ、ハ、も、ハ、さ、ハ、ど、ハ、う、ハ、り、ハ、浦、ハ、山、ハ、し、ハ、き、ハ、抱、ハ、い、ハ、や、ハ、う、ハ、よ。  
き、ハ、ん、ハ、よ、ハ、せ、ハ、う、ハ、せ、ハ、ま、ハ、し、ハ、き、ハ、り、ハ、と、ハ、こ、ハ、の、ハ、く、ハ、て、ハ、か、ハ、つ、ハ、ち  
よ、ハ、く、ハ、な、ハ、り、ハ、ま、ハ、ど、ハ、つ、ハ、ね、ハ、ふ、ハ、よ、ハ、く、ハ、て、ハ、あ、ハ、ら、ハ、ん、ハ、い、ハ、ま、ハ、し、ハ、て、ハ、よ  
か、ハ、く、ハ、ん、ハ、う、ハ、し、ハ、年、ハ、お、ハ、い、ハ、て、ハ、物、ハ、の、ハ、例、ハ、な、ハ、ど、ハ、志、ハ、り、ハ、て、ハ、お、ハ、も、ハ、な  
き、ハ、さ、ハ、ま、ハ、し、ハ、こ、ハ、る、ハ、ま、ハ、い、ハ、と、ハ、つ、ハ、き、ハ、ぶ、ハ、し、ハ、う、ハ、め、ハ、や、ハ、き、ハ、し、ハ、と  
の、ハ、も、ハ、り、ハ、づ、ハ、う、ハ、さ、ハ、の、ハ、氣、ハ、あ、ハ、い、ハ、ぎ、ハ、ぬ、ハ、う、ハ、ば、ハ、き、ハ、た、ハ、ん、ハ、を、ハ、も  
う、ハ、り、ハ、て、ハ、さ、ハ、う、ハ、ぞ、ハ、く、ハ、何、ハ、ふ、ハ、志、ハ、く、ハ、な、ハ、ひ、ハ、て、ハ、か、ハ、ら、ハ、ぎ、ハ、ぬ、ハ、さ、ハ、ど  
い、ハ、ま、ハ、め、ハ、う、ハ、う、ハ、て、ハ、あ、ハ、り、ハ、う、ハ、せ、ハ、な、ハ、や、ハ、と、ハ、こ、ハ、そ、ハ、お、ハ、ぼ、ハ、ゆ、ハ、ま、

とのもりづあ  
さ抄云、は殿の  
掃除、ハ、あ、ハ、お  
ら、ハ、る、ハ、ど、ハ、の、ハ、役、ハ、ま  
ら、ハ、女、ハ、な、ハ、を、ハ、り、



ずみおんじそ  
ありき抄の從  
たぐへり。隨身  
をつらふよよ  
きておもつき  
いきほひもま  
まとく。隨身の  
人ぐくをつあ  
よハあぐすつ  
ろく人のある  
り。

職のみぎうし  
ハ。定子のねそ  
し。ます申。文職  
の内務屋を云  
頭辨ハ。行成々  
まり。皇御三草

をよこつ。又。おんじそ。あられ。いみじく。び、  
し。をうし。き。君。遣。も。き。おん。ま。き。い。いと。き。  
ぐ。し。糸。あ。と。を。う。し。く。よ。き。つ。う。さ。と。思。ひ。し。れ  
ども。き。う。が。い。ね。の。志。り。み。ど。か。し。て。む。お。お。ん。あ  
き。ぞ。い。と。ろ。ろ。き。や。

職の御曹子 四十三段

志きのほざうし。の。西。お。も。て。の。た。て。志。と。み。の。も  
と。よ。て。頭。弁。の。人。と。お。を。い。と。久。く。し。ひ。ま。ぬ。  
れ。バ。さ。し。出。て。そ。れ。の。た。れ。ぞ。と。い。つ。バ。糸。の。内。侍  
なり。との。ぬ。あ。な。ふ。う。は。さ。も。か。し。ひ。ぬ。あ。大。弁  
ん。え。バ。お。推。ま。り。て。い。お。ん。お。を。と。い。つ。バ。い。み。ド

の一人也。

いみじく見え  
て云々。義隆云。  
是より下の文  
義ハ。行成口れ  
さま。ご。ご。と。を  
か。し。き。筋。あ。ど  
ま。ま。て。つ。け。た  
る。ゆ。い。な。く。て  
た。ご。あり。よ。や  
ま。う。お。お。し  
ゆ。あ。を。つ。ふ。く  
さ。を。皆。人。さ。の  
み。お。う。る。よ。と  
ハ。皆。人。ハ。行。成  
口。の。つ。く。ろ。ひ

く。笑。ひ。て。た。れ。が。か。く。る。み。を。さ。ん。い。ひ。き。る。せ。け  
ん。ぞ。れ。さ。を。せ。そ。と。か。ら。ら。ふ。あり。との。ぬ。あ。い。み  
ド。く。ん。え。て。を。う。し。き。す。ぢ。る。ぞ。た。て。た。る。み。い。な  
う。て。た。ご。あり。る。や。う。を。る。を。み。お。人。さ。の。み。  
り。し。る。ふ。猶。お。く。ふ。う。き。ほ。心。さ。ま。を。ん。志。り。し。れ  
バ。お。し。な。ご。し。き。を。と。お。あ。よ。も。け。い。し。よ。ま。志  
る。し。め。し。た。る。を。つ。ひ。お。女。い。お。の。れ。を。よ。ろ。こ。ぶ  
者。の。た。ぬ。あ。か。や。つ。ら。り。し。士。ハ。お。の。れ。を。志。ね。る  
人の。為。よ。志。ね。と。い。ひ。し。る。と。い。ひ。あ。を。せ。つ。く。中  
ゆ。お。と。ほ。た。あ。ふ。その。を。ま。う。や。な。き。な。ど。い。ひ。か。を  
して。あ。る。ふ。さ。う。き。人。ハ。た。ご。い。ひ。お。え。み。ん。ぐ



なく。たゞあり  
よ。おし。の。あ。を。  
さ。む。り。の。人  
ぞ。と。た。だ。大。よ  
そ。よ。足。ち。り。を  
る。を。つ。ふ。な。り。  
さ。る。を。清。少。納  
云。を。ぐ。り。の。行  
成。口。の。保。ま。ん  
の。お。も。ぶ。き。を。  
知。り。と。な。り。  
お。村。翁。の。ま。婦  
の。み。よ。え。ら。れ  
る。流。ハ。さ。あ  
へ。り。

る。き。こ。つ。と。も。も。な。ど。つ。ろ。ろ。を。な。し。つ。ふ。よ。然。る。こ  
そ。う。こ。て。見。ふ。く。な。れ。ご。と。人。の。や。う。ふ。ど。き。や。う  
し。歌。う。ひ。る。ど。も。せ。び。げ。せ。ま。ま。し。な。ど。そ。し。る。  
さ。さ。ふ。こ。れ。う。き。お。お。つ。ひ。な。ど。も。せ。む。女。の。目。の  
た。て。さ。ま。ふ。つ。き。眉。の。ひ。ひ。お。お。ひ。り。り。鼻。ハ  
横。さ。ま。ふ。あ。り。も。も。さ。ま。は。つ。き。あ。い。ぎ。や。う。づ。き。  
お。と。ぐ。ひ。の。ま。さ。さ。び。な。ど。を。う。げ。よ。て。考。ふ。く  
か。ら。ご。ろ。ん。人。な。ん。お。り。け。う。る。命。き。と。い。ひ  
か。の。ら。猶。顔。の。いと。お。く。げ。な。る。い。心。う。く。と。の。み  
の。ぬ。へ。ま。ま。い。て。お。と。ぐ。ひ。細。く。あ。い。ぎ。や。う。わ。く  
れ。た。ら。ん。人。の。あ。い。さ。う。の。こ。き。あ。し。と。御。前。よ。さ

そ。ん。の。さ。ぶ。ら  
ふ。お。云。家。ら  
で。も。そ。ん。し。て。  
登。し。ぬ。ん。ど。く。  
と。が。も。の。本  
性。ハ。行。成。の  
の。さ。ま。ふ。く。

へ。あ。う。け。い。さ。る。お。を。ど。け。い。せ。さ。せ。ん。と。て。も。  
其。も。ど。わ。い。ひ。そ。め。し。く。を。く。づ。ね。ふ。も。な。る。を。も  
よ。び。の。だ。せ。つ。び。ね。お。も。き。て。し。ひ。里。あ。ら。ふ。い。文  
の。き。こ。も。み。づ。く。も。お。を。し。て。お。と。く。ま。み。く。バ。  
さ。か。ん。中。う。る。と。ま。う。し。よ。ま。み。ら。せ。よ。か。の。の。後  
ふ。其。人。の。さ。ぶ。ら。ふ。な。ど。い。ひ。出。れ。ど。い。し。も。う。け  
ひ。り。ず。な。ど。ど。お。を。ま。ら。あ。ら。お。ま。く。が。ひ。さ。ご。あ  
ば。か。み。も。ま。て。お。し。ら。を。ら。そ。よ。き。さ。み。お。は。せ  
れ。と。う。し。ち。み。夢。中。ま。ど。と。お。せ。ら。の。心。の。本。性。と  
の。み。の。さ。ま。ひ。つ。あ。く。つ。ま。ご。ら。の。心。の。心。を  
り。と。の。ぬ。へ。バ。ま。て。た。ご。り。な。し。と。い。い。あ。な。る



中よりハ細今の  
のせの僅言ウ  
と必ひしよか  
くおくよりの  
へる細くをわ  
かする事あま  
さあるべけれ  
ばよくくんを  
とめて見るべ  
し。

うへのまぬが  
ちハ袍をウリ  
よて下詔衣をき  
ずる。

みをいふふうとあやしげればづらひつゝ中よ  
しをどくく小もいさるゝかうかくふとあ  
バ何うとづる見えなるともせよかしとのぬおを  
いみじうよくげなまばあゝんいえお中だ  
とのぬひしよよりてえんえなまぬとつくばげ  
みよくもぞふるづつバかうんえそとておのら  
からんつべきをりも顔をあつぎなるとしてまこ  
とふんぬもまごつろよそ経ごとくぬいざ  
りたりと必ふふ三月つごり此冬のみほし  
きよくたよあゝんうへのながらよて殿よの  
とのぬおもありつとめて回さく出るまで武部

うへのおまへ  
ハ一床院家の  
おまへハ中家  
定子なり  
おまへハかき  
ぬをかまのう  
へよきてとあ  
りてかこへよ  
殿の字をあて  
たれどいづ  
之一本よよう  
て改り。

のむ中々ひさしお福するふおくのやり戸を  
あけさせぬうてうへのおまへさまのおまへ出さ  
せぬればおまへもあつぎまごふをいみじくと  
らそせぬふからぎぬをたごかぎみの上ようち  
まてとのぬおもたふもつづぬれまごあるう  
へよおまへまごしてぢんよりいでいるものさど  
は流る殿うんのつゆさうでよりきこておひな  
どもあるをうきさをとせると笑いせぬあさ  
たせ給ふよあつらまごのいざとおひせらる  
れど今おなをどつろひてこそとてまゐるま  
いらせぬひておほりでおまごもいひあませ



くろくろ物に於て  
殿上の名をひま  
より、序のうみんゆ  
りなり。

則隆の武節の正之  
源人武節正之の  
考は帝の侍使の中  
等の位方へおれが  
侍更納言など心  
やすきまらるべし。

幸と申の上よ

てあつるふ。南のやり戸のそをみき、情のそさ  
しいでたうふさきりて。さどねのさうしあきさ  
るより。くろみくろ物の見ゆれを。のりきそのがぬ  
たるなありと。おひて見もい進で。たふことみど  
もをいふよ。いとよく息みくる。顔のさういのでこ  
るを。則隆をあり。そいとて見やりたれ。あゝぬ  
かあり。おさましと。笑ひさうと。き懐ひきを  
ほくくろれど。頭弁うて。こそおさう。られんえ  
ち。と。さつものさ。いとらちを。法具よ  
あつる人。い。つ。さ。よ。む。き。て。あ。れ。が。顔。も。ん。え  
と。い。出。て。い。い。と。さ。う。さ。く。も。ん。え。つ。う。れ。と

くろく一本あり  
くろく。一本あり  
て。おの。心。を。い。ひ。合  
く。わ。ど。よ。ま。る。べ  
し。  
な。ど。か。い。み。と。云。々  
ハ。我。教。を。み。ま。さ。き  
と。云。ま。う。ら。い。う。で  
さ。や。う。ふ。つ。ぐ。み  
陸。ひ。と。さ。う。さ。う。さ  
う。い。あ。ふ。ま。ら。る。べ  
し。み。え。さ。う。の。こ。ま。ひ  
し。ま。あ。れ。い。え。

殿上の名をひま  
上のとのあふくろ  
侍更ふふをよりが  
ねてん。うらふん

のたすく。バのりた。くと思ひ侍進。バあやぐりて  
ぞか。い。な。ど。か。い。え。と。の。こ。ま。ひ。い。あ。さ。つ。く。ぐ  
の。い。ふ。ま。女。の。ね。お。き。た。る。顔。を。ん。つ。と。よ。ま。さ。と  
いつ。バ。あ。つ。る。人。の。つ。ぼ。ね。お。ゆ。き。て。か。い。む。み。て。  
又。も。い。み。え。や。さ。ら。と。て。き。た。う。つ。る。な。り。ま。ら。う  
への。お。さ。し。つ。う。お。う。ら。あ。つ。を。さ。さ。ら。う。さ。う。ら。う  
よ。と。て。そ。れ。よ。り。後。つ。ぼ。ね。の。さ。だ。れ。う。ち。か。つ  
き。な。ど。志。た。ま。ふ。あり。

殿上の名だいなん 四十四段

殿上の名だいなん  
い。う。ら。ふ。れ。い。や。ぐ。て。と。ふ。ま。を。ら。う。と。是。音。ど。も。さ



は次子澁口ののり  
のりといふも名得  
と同一き  
おとすへて僕は云  
耳はおとすへて  
といふも之は柳菴  
をさへつてん

ささひろの左多程  
以時明の男方弘之  
後入して楚忽人  
多へふ持まぐ  
と名をささのたまへ  
てさへつてん  
かんがへてハ勘  
の部のまもあこれ  
ともうつうて此  
ハ柳菴用ひまうり

てらづれ出るまうのほつぼぬのひんがた  
もてお耳おとなうてきくふおん人のあのみ  
いふておねつぶらむうあうもよき  
あぬ人をもほおみきつらけたらんいかた  
ぼゆらんたのりあうあうあうあうあう  
もまのいふてぬあうときく程ふ澁口のあう  
しつこの言そめきいづらあう人のいとさく  
ふみこぼあかしてうしつこのすみの言欄よ  
ひさまぐきとかやうああひまあうのう  
は向ひてうしつこの誰う侍うとやあふど  
こそさううたれ細う言う名のあううさう

さいちむるり  
柳厨子野の夜様極  
以下の詞柳よてハ  
解がうけれバ一本  
みよつてかく改め  
出り

や、を柳小波こと  
あうたがへりや  
ハ人を呼かふる聲  
こそまをまねてや  
ハとよヤレヨ  
ウくまのりま

らハねばよや名をいぬつうまうあう  
奏するもいふとさへバあうあうあうあう  
きくて帰るをすまひらきくすとして君達のを  
しつこの言そめきいづらあう人のいとさく  
て澁口あうあうあうあうあうあうあうあう  
をたきていひのさうさうさうさうさうさう  
たが登ようあらんえあうあうあうあうあう  
くさめいひあうあうあうあうあうあうあう  
ぞやとてとりふまうとむいとさうあうあう

あげたまき抱ノ下 四十五段  
善くてよろしきまのふれげも女の名をいひる



まづうらみづか  
らまがくもいつり  
声もさきさきのふ  
女よりのよをせよ  
うよ上へかへる  
文法あり  
かゝりきさへ枯  
わくとも乾めくも  
むらへり。

れてよびたるこそいとあくるれまらむづも  
何とのやかこもどい覺えでつかいをかこつ  
つ所の局まよふよりて。換るぞよおほめか  
んいあしうりぬしれどこのもつづこころら  
ぬあまそどがらひ。宿人およあるものをあて  
よむせよかこもづううい。あまもさきまふ。  
このものしらもどるぞいさねどよし。まはんと  
ちごい肥うちより。受領などおこなもちこる人  
いふとまのより。あまうりやせからめさるるい  
心いられたらんとわし。そのらるよるげよりい  
うかひ童のなりあし。てもいふことをあれこ

ころかりと句。着  
履など云々とすべ  
し。こいつる後。おみ  
供人のお後の彼こ  
るみるど。ハ。つ。あ  
とも。着馴てあ。あ

とものどもいざれど志りふそちてこそいけ。さ  
きふつとまゆられいくものきこるげかろハ心  
うし。軍の志りふ。ことなる事なきをのこどもめ。  
つまどちたるいとんぐら。細らうちをその子  
ずあぶんるどええぬべきが。黒きそのまののまを  
ごを。狩衣ハ何もちまき。バみくる。走る事れ  
うさるどふのど。あ。のよて。うちそひ。うら。こそわ  
がものといええね。程人うさなりあし。て人つ  
うふハ。日ろり。り。ぎ。や。れ。な。ど。け。こ。う。ち。あ。く。れ。ど。  
なまむみてつるきハ。さうか。こ。なり。や。つか  
ひ人をどいありて。さら。た。べ。の。き。こ。る。げ。さ。う。こ



らも罪なく見ゆる  
人いさもあちど  
とこといへるより  
いささうぬべし

人の家の以下。借れ  
あちど。女。美。解。  
ぐ。つ。の。考。あ。べ  
し。さ。ま。ま。て。た。も。  
何。ゆ。も。を。あ。ち。  
深。長。ハ。さ。ま。ま。を。垂。る  
も。な。る。べ。し。さ。ま。も  
の。と。も。ト。ひ。と。お。ち  
さ。る。な。ま。と。い。へ。り。

そ有まどくえゆれ家ふわらう人もそこふあち  
人とて使うても。まらうどなどのいきむらあも。  
をうきつらひのあま。えゆら。いとをうし。  
人の家。れ。前。を。う。ら。あ。さ。ぶ。ら。ひ。め。き。こ。る。を。め  
こ。つ。ち。ひ。を。ひ。の。る。ど。し。て。を。め。こ。ら。れ。十。ぞ。の  
り。や。う。の。髪。を。う。げ。な。う。ひ。き。を。へ。て。も。さ。を。き  
て。う。ら。も。又。五。つ。六。つ。ぞ。あ。ま。ま。あ。が。み。ハ。ら。び  
の。も。と。に。か。い。く。み。て。つ。ら。いと。赤。う。ふ。ら。う。の  
る。あ。や。し。き。ま。さ。も。だ。ち。ら。物。あ。ど。さ。う。げ  
た。う。い。と。う。つ。ら。し。車。と。め。て。い。ご。き。い。ね。ま。不  
しく。こ。そ。あ。れ。又。さ。て。い。く。ふ。た。き。も。れ。香。の。い

志ぢり。ち。ち。た。え。一  
本。ふ。ふ。ぢ。よ。お。う。け  
さ。ら。さ。と。あり。は  
あ。よ。う。し。ら。ん。れ。  
さ。の。美。陰。云。一。本  
よ。れ。ば。さ。の。得  
え。

厨女のみづしそん  
る。さ。ら。ふ。う。つ。が。ふ  
う。り。や。め。あ。ち。こ。そ  
ひ。と。け。ふ。云。あ  
り。

みどくかへ。うら。いとをうし。よき。家の中門。の  
て。び。ら。う。げ。の。車。れ。白。う。清。げ。な。う。ば。し。を。さ。う。の  
下。と。ご。ま。め。の。う。わ。ひ。いと。清。げ。な。う。志。ぢ。ふ。さ。ら。た  
ら。こ。そ。め。で。さ。ら。れ。五。位。六。位。を。ど。の。さ。う。が。さ。ね  
の。志。り。を。さ。み。て。さ。の。め。いと。志。ろ。さ。う。さ。ふ。う。ち  
お。き。な。ど。し。て。ど。う。い。き。ち。ら。う。ふ。よ。又。さ。う。ぞ。く  
し。つ。ば。や。さ。ら。ひ。お。ひ。う。ら。む。の。志。ん。の。出。入。う。い  
と。つ。き。ぐ。し。ら。り。や。め。の。いと。清。げ。な。う。の。さ。う。い  
で。さ。う。お。が。ど。の。人。や。さ。ぶ。ら。ふ。を。ど。い。ひ。と  
う。と。を。う。し。

瀧の 四十六段



青野の瀧、山城の瀧、  
布留の瀧、後、  
んは、  
る路、  
跡を、

あまう川、  
中ハ、  
多川、  
ふハ、  
して、  
流れて、  
うな、  
怪、  
のや、  
らか、  
くて、

音、  
一、  
る、  
か、

川口 四十七段

あま、  
と、  
を、  
き、  
樂、

浮田川、  
り、  
言、

川、  
の、  
たり、  
けん、

橋ハ 四十八段

あ、  
名、  
ど、  
の、  
ひ、  
した、

若、  
橋、  
山、  
折、  
一、



ひらり。

をり。うらうらねの橋。

里ハ 四十九段

十市のかま。止保知  
と和名抄にありハ  
十保市とありを奈良  
朝の時、三字を二  
は改らね、時保の  
字を省き、うらま  
誤りあり、と濱臣  
の説。

逢坂の里。 ながめれ里。 いさめの里。 人妻の  
里。 たのめれ里。 朝風の里。 夕日の里。 十市の  
里。 伏見の里。 長井の里。 つまらりの里。 人ふ  
とられたるうやあらん。 我とりたるうやあらん。  
いづれもをう。

草ハ 五十段

さうぶ。 こも。 あふひいとをう。 祭のをり神  
代より志て。 さらかぶとをり。 じんいみどうめ  
でる。 物のさまもいとをう。 ちかぶらうも名

皇代弘訓云。 葵ハ三  
種あり。 一つハ、加茂  
の祭に用ふる葵。 一  
つハ、蜀葵。 一つハ、花さ  
く葵。 俗よ、ゼニアフ

ヒ。 とつふ。 一つハ、向  
日葵。 一つハ、ビグルマ。  
とハ、ヒマハリ。 とハ  
いへり。 三種共、ま  
よらみなり。  
堀川百首壁におふ  
る。 つまで葵の、い  
つまでう。 けれどと  
ふべき。 あまきーの  
里。

のきさの。 きさなり。 心あがり。 じんと思ふ。 み  
らり。 ひるむら。 こけ。 こづた。 雲まの青  
茶。 かぶら。 あやの。 むんよても。 ことおよりハ  
をう。 あやふ草ハ。 岸のひこひよねう。 じんも。  
がふたの。 げさく。 あをれなり。 いつまで草  
ハ。 あふる。 不いとほの。 さく。 あをれなり。 岸のひこ  
ひよりも。 こまハ。 へづれ。 やをげなり。 まさ。 じんい  
し。 使さぶ。 ふハ。 えぬ。 ひび。 やあ。 じんと思ふ。 あぞ。 こま  
き。 こと。 な。 草ハ。 思ふ。 事。 さ。 さ。 よ。 あ。 じんと思  
ふ。 物を。 又。 あ。 じん。 事。 を。 う。 じん。 事。 ふ。 じん。 事。  
づれも。 をか。 じん。 事。 じん。 事。 じん。 事。 じん。 事。

こ。 じん。 草。 じん。 事。  
お。 草。 じん。 事。 じん。 事。  
じん。 事。 じん。 事。 じん。 事。  
お。 草。 じん。 事。 じん。 事。  
お。 草。 じん。 事。 じん。 事。  
お。 草。 じん。 事。 じん。 事。  
お。 草。 じん。 事。 じん。 事。  
お。 草。 じん。 事。 じん。 事。  
お。 草。 じん。 事。 じん。 事。  
お。 草。 じん。 事。 じん。 事。











あなどれいとりあ  
まらむみぎうが  
—きまもまり。  
かひろきいあやふ  
げよよくくとい  
とてふさつふれと  
美座いへり。

千載系ふ發字  
ハ神のゆるハがけ  
さくふ吹よハ吹下  
既ふあふづーあふ  
例のまき—まき  
神まねとあれどあ  
き—さうといええ  
き。

うまいとこきが。新雪ふぬれてお靡きつる。いと  
ぞりのの物やハあふ。秋のまてぞいと見不るさ。  
色くお秋ま嘆うり—花のがさもたなく散るる後。  
冬のも忍まぞか—らいと白く。たふどれつる  
をもた—でむく—思ひ出が不よまびきてかひ  
ろぎ—とてうんよこそいみじうあふ。あまよそふ  
つり有て。それそ—もこそあハれとも思ふづけ  
れ。萩のいと色深く。えさたをやりお嘆つるが。  
朝露よぬまて。なあくといろごりふ—つるさを  
鹿のまきて。まならまらんも心ことなり。 から  
あふひら。取らきて見えぬど。日のかげよ—さの

ひくか—づぐらんぞる。べとの草木の心とも覚  
えでその—きどのの色ハこからぬど。うくふ吹お  
ハ。いもつ—どもこ—なる事なくれど。さうりも  
てぞんる。とよまれなる。さうさうさう—。 さう  
びハ。ちうく—て枝のままなどハむつ—くれど  
を—。雨るとそれゆきつる水のつら—ろぎの  
ち—などのつ—み。みづれ嘆つる夕をえ。

たぼつのをなき抱 五十四段

十二年のふごりの不う—のめおや。 あ—ぬ  
不よ。やみなるふゆきたるふ。あらさふもぞある。  
とて。火ともむさで。さうさうさうさう。 いま











弘綱云。びりり。こ  
と。か。ん。を。と。あ。て。え  
る。べき。なり。

けぬき。ハ。和名抄。ハ。  
鏡子。介。奴。岐。と。あり。  
か。こ。て。ん。の。に。相  
り。か。こ。る。侍。と。お  
ふ。は。掃。と。あ。ら。ハ。か  
る。さ。の。へ。り。

そん。ハ。手。平。まで。原  
出。ま。す。

ありがたき物 五十六段

志うとふほめらるゝむこ。又志うとあよふも  
うよあのみきみ。物うぬらるゝ志らうまのけ  
ぬき。志うそしらぬ人のまき。露めらせか  
もなくて。かこら心ざうとまをば。世よあるほ  
ど。いさ。可。お。き。ず。ま。き。く。因。ド。和。よ。信。む。人。の。  
か。こ。み。よ。ま。ち。か。さ。い。さ。の。お。ひ。ま。れ。く。よ。う  
い。さ。り。と。思。ふ。の。つ。ひ。よ。見。え。ぬ。こ。そ。う。ら。れ。  
物。集。る。ど。書。う。つ。も。か。ん。よ。ま。み。つ。け。ぬ。と。よ。ま  
双。紙。る。ど。い。み。ど。く。心。志。て。か。け。ど。も。ふ。こ。を。き  
た。な。げ。ふ。る。め。れ。男。も。女。も。法。師。も。笑。ふ。く

お。こ。す。の。ト。ふ。あり  
ぐ。く。と。さ。を。あ  
め。り。

肉のつがね 五十七段

語らふ人の。末すで申よき事う。つひよ  
きだんざ。かいねりう。せうふ。あ。あ。あ。で。こ  
と。ん。え。て。お。こ。も。  
肉のつがね。五十七段  
肉のつがね。ぬ。ぬ。い。み。ど。う。を。う。か。み。の。こ  
志。と。み。ぬ。れ。ハ。風。い。み。ど。う。吹。入。く。ま。も。い。と。涼  
し。お。ハ。雪。霰。る。ど。の。風。よ。ふ。ひ。て。の。た。ら。も。い。と  
を。う。せ。ぞ。く。て。わ。い。べ。る。ど。の。の。が。り。あ。ら  
を。あ。ら。れ。ハ。屏。風。の。う。ろ。な。ど。ふ。か。く。し。も。あ  
た。ま。ば。ら。と。和。の。や。う。よ。高。く。笑。ひ。る。ど。あ。せ。で  
いと。う。ひ。ま。ど。も。た。ゆ。ま。ぎ。心。づ。く。ひ。せ。う。







かかろふ今のお引  
をどの取まで元井  
ふかけてくれら  
おれんぶうてもか  
うと几帳の取来  
あきつるさいへ  
るり。  
加茂原町家の何  
樂あろふ先林の井  
て成樂あて次は調  
樂とて樂へ每人  
をどののへさ  
ふるり。

いきてそのいりゆるやうなるもとよりい  
いとそうしうんまいとほげある硯引を  
てふりきもい鏡こひてびんなどかきか  
たももせむをその三尺のきちやうを  
たもよとらうの志ぬいたがむしうぞあると  
もそてう人内もあむ人と相いふ歌のむとふ  
いとふとあいらりるこそをうくれさけの  
いとさく経うらん人などやいあむあむん程  
よの考れいこのみぞあむんまうてアんの祭  
のてうがくさどいみどりうをうとのもりは  
官人などの長き松を高くとも志てくびいひき

君つら調ふよ  
らとくくさり  
日のもうぞくハ東  
帯之直衣ハ病衣  
束帯ハ直のよそひ  
あり。

荒田ふゆふる  
の花ハ直衣ハ病衣  
ふんえしう  
まめくハ忠誠人の  
言ハくわあつる  
るのまむふハ惜  
して正直とさう

入てゆけむさたハさうつらつらむのりなもふを  
りうあそび笛吹出て心ごとふ思ひたもふ君  
だちの目れさうぞくさてまともなり物いひなど  
まもふ殿ふ人のむあむんどもめさきをまのび  
やうふみどかくおのが君ごられまうにれい  
うもあそびよまどアてまふ似むをそのうきこ  
ゆあふけぬれが猶あけてぬるをまうつふ君ごら  
れあふてあうふおふるとみまの花とうい  
たもも然ふびハ今さうさうきふいのれ  
すめ人よりあむんまむくさうさうあゆみく出  
ぬるもあれバ笑ふをまうさうやまどさう夜を捨て



をうふ  
とありてハガ  
て有り。

いそぎ給ふとありてるどいへど。こつちをどわ  
あかしくんだふもぬぞのりもー人やたひてと  
らふると見ゆうやうでまどひ出るをあがり。

一声の秋

五十八段

又底、権記、小右記、ま  
どよみ、さう、南の  
底のそらぎの底を  
りふ、又、さ、この、深  
まて、底、ま、へ、し、  
ま、い、へ、り。

まきみのほごうしふおそしすまこころ。こごちるまど  
そるかよ物あり。屋のさやも言うけどやれど。  
まごろみそりしうねがゆ。母屋ハねよありとて。  
みるへびとて出して。南のひさし。ふ。まきちやうこ  
て。ま。こ。び。さ。ふ。女。房。い。さ。ぶ。ぬ。この。点。の。み  
うどより。左。東。門。の。陣。ま。い。ぬ。あ。上。達。部。の。ま。き。ど  
と。殿。ま。の。い。み。り。く。れ。ば。お。不。さ。記。こ。ま。き。と

お不さきハ上達部  
こさきハ殿上人の  
糸おふをつふ皆  
身の扱実さへし  
と扱ふあり。

扱ふ。進。付。と。あ。れ  
ど。進。後。て。る。ふ。  
秋。と。あ。る。詩。を。誦。せ  
ら。れ。し。

聞つけてささぐ。あま、びよまれば其あども  
を皆きく。ささきて。そさぞかれぞといふよ。又あ  
らざるどい。つ。く。へ。て。見。せ。や。ど。も。ま。よ。い。ひ。あ  
て。さ。ハ。さ。れ。づ。そ。ま。ど。い。ふ。も。を。う。し。あ。り  
あけのつみどりきり。り。り。た。る。屋。ふ。お。り。て。あ  
ま。く。ま。き。こ。あ。し。て。清。ま。へ。も。も。ね。き。さ。や。ぬ。ん  
り。う。へ。ま。る。人。ハ。皆。ね。り。ま。ど。し。て。あ。そ。ぶ。よ。や。う  
や。う。の。り。も。て。ゆ。く。左。東。門。の。陣。ま。ま。り。り。て。ん。ん。と  
て。ゆ。け。ば。ま。き。も。く。と。進。つ。ぎ。て。ゆ。く。ふ。殿。上。人。あ  
ま。さ。あ。り。し。て。あ。ま。の。一。こ。点。の。秋。と。ど。ん。ど。て  
い。る。ね。と。ま。れ。ば。お。げ。い。り。て。物。ま。ど。い。ふ。月。を。見



路ひくるとどめて、舟もむもあり、よろこびひる  
も殿上人のさゆるおろす。上達部中のでまゐ  
りのあふ。おろあけふいそぐ事なまき、かある  
びまありたまふ。

あぢきるまき 五十九段

ついでと思ひこちて、さやづうへよあまいる人の  
も終うがりてうるさげよ思ひこる人よまいと  
れむつうき事とあれば、いそぐう海うでま  
んとつうらと草さして、出く親をうめくたれ  
ば、すこまありまんとつうふ。やうこ終るう  
さげたまふ。さぶくよ思ひたう人を、さのびて舞

あぢきるまきハラチ  
モナイ。ウトマシイ  
さぶくつあさる。

こつとぐさハ俗ヨク  
ナクセ。といふさこ  
とらうこハまふハ  
うわさううめと  
と抄あり。  
志のびてハ堪忍

おとりて、おろふまをらむとさぶく人。

いとほしげなまき 六十段

人よよみてとせしる舟のふめらう。これど  
それう。とほきありまきまう人め。つぎくえ  
んうづねて、ええんといもそれバ、さうりう人め  
がり。おほざりふかきとやりたるふ。なまいつと  
りるり。とらざらして、返事ととせせでむとく  
ふいひるう。

こつちよげなまき 六十一段

うづるのこつとぶき。神楽のふんぢやう。池の  
そちよの村雨よあひうら。神楽會の馬をさ。

て。一本よ志ひて  
とあり。さうらう  
らん。  
いとほしげなまきハ  
俗ヨキノドクデハ  
ナイ。といふまへ。

むとくまハ、さあ  
しげよとつあさこ  
おろふむとらる  
物の条あり合せ考  
あざ。

卯杖のみ。江次第。公  
夏根涼などにくと  
神楽の人長ハ舞人



陪従あどの長く  
浪靈會ハ祇園密六  
月十四日之禁中よ  
り引れしもの長を  
うまをこと云。  
松帳ハ帳をうりて  
人を判しる事有  
し。  
とりぬてる物を扱  
ふよ一服とくさる  
ハころハ美陸の考  
ふよりてくちよ  
げる物入さし  
くつものくとり種  
くつ後あれど皆こ  
しうあふん。

又西中やう急のふりもさとりもてるもの。く  
つのこととり。除目よ第一の國えたる人。

御佛名 六十二段

御佛名のあしづごく繪乃西屏風を渡して。  
つゝあは覺せてせもあう給ふいみどりゆききさる  
限あし。是んよかとおわせられどさるふ見  
侍くドとしてゆききさるふ。うへやふくまきさるぬ。  
雨いつふりて徒然なりとて。殿上人への御局  
みめしてはあそびあり。さる方のお納言びいと  
めでし。海政の君筆のうと。行成みえ。経房の中  
将筆のふえなどいとたゆらうひとさるりあ

琵琶行ハ琵琶声停  
飲語遲この語を伊  
周公の祿吟せられ  
しなり。

そびて琵琶引やみくさる極ふ。入納言殿の琵琶は  
聲えやめて。抽語さる事ねと。しつあそびとど  
ゆひしふ。がられたりも。おき出て。つみま  
おそる。くれど。程抽のめでさきハえやむま  
とて。是もさる。あはれをさふハあはね  
ど。をさるのことさる。つくりいでたさやうなり  
しなり。

頭中将 六十三段

頭中将のそらるるそらるるごとをききて。いみど  
ういひたし。さみしふ人とさひくんなど。殿上  
もてもいみどくるんれぬ。あときくふ。細くけ

頭中將抄云。恒徳公  
の三男齊信ハよて  
者時飛人びる。  
こハ。いぼをくれ  
り。後すさるるべし。



袖を袖を脱ぎ  
かひききり。

よふあふぐらふや  
うに信らふらふ  
次してあまふとほ  
少のいらへしるふ  
志もよらふとて  
あはれをよて目をき  
してなり。

まどまらうとならばこそあつめおのづからき  
なわりのひてんなど笑ひてあふあ戸のかこ  
へまどまらうもあも聲もどもをりハ袖をふ  
ぎて霞うたうせすいみどらふみゆふをどの  
くといもずんもつれでまぐも二月つごむりあ  
こ雨いみどらふりてつれぐなるよは抱いみよ  
らむりてよもぐふらうぐくこそあれ抱やい  
ひおやらまうとなんのゆふとくかくれどよ  
おあふとまどいしてあふふ一日志もふらうし  
てまありこれぶよこのおとぶよいせぬひみ  
りちげこの志もあふちちくとりよせてさし

まどまらうと  
なわりのひてん  
のまらう。

まどまらうと  
なわりのひてん  
のまらう。

つどひてへんをぞつくあまらうれやまらう  
せまどまらうつけてらくどまらうとまらう  
何いみのがりつとんとあがえてまびつめと  
ふあふれバ又そこふあつまりあておまどいふ  
お何ぐらうぶらふといとまらうふつああや  
しつらのあふまらう事のあるまらうとまらう  
殿守づつまらうたづらうふんづつまらうでまらう  
き事まらうとつづまらうとまらうこれ頭中お  
殿のまらうとまらうおはのりとりとまらう  
いみどくふらうまらうをいのまらうは又まらう  
まらうとまらう今いそまらうまらうまらうねまらう







女一ひゆるハ掛  
ふ破袂人のいひこ  
けをほけのあより  
言出せうと信どと  
もあつてつねさく  
ねこまよとある  
がごとし。

のむがふ絶をて後こそささむがにえあふねも  
いひゆるあふと出てどいさか何とも思  
ひあふむづれなきがいとねさきをこよひあ  
ともうとも言あまりておみるんくとして皆  
いひ合せて事を見今に見るまどきとて入  
ぬひぬとて殿さづうさ来りしを又おひかへ  
てたが袖をとへてさうさいをさせむこひと  
りもてこどバ父をかへしとれといまへてさ  
むのりふる雨れさのりみやりたるふいとさく  
及びきたりこれとてさへ出さるがありつる文  
なればかへしてさうさのさうさあをせ

おめけバハあと感  
してさけおまの宇  
治拾遺よぬも人あ  
りて人さうすまり  
とおめけバ言くと  
あよ同くうめくと  
ハ別くと美澄ん  
り。

おめけぢあやしいうるさみぞとて皆ふりて見  
るよいみどきぬも人うれ猶えこそ捨まどなれ  
と見えさうさてこれがもつけてやらん源中ね  
つけゆるどいふおあくるまどつけりづひく  
なんやよし此の必深りつたよぶき事さうと  
おん言のいとみどくかさうさいさきまぞい  
ひさのせては名ハ合の草のいかりとなんつけ  
たうさといそぎさうあひぬまばいととらさき  
おまよであらんこそらさうさのさくべなれとい  
ふかどお修理亮則光いみどきよろこび申ふら  
へよやとてすありたりつるといハバなぞつら







同ドかゝる徳業を  
もあつたさうし  
おろく考まつり

まづとめこれば  
抄云はかを唐宗の  
めとておと君すあ  
りしものすまうかう  
ねえ

袖は横はよまふ袖  
をふくまて云と

んハおのよともおふまづくなんといつバげふあ  
まこしてまうまあもんもまうでねつてもあ  
りくかれられもまんむねつがねるねがゆ  
秋いさうとせうとつふまをばうへまで皆志  
ろしめ殿上にもつうさ名をばいもでせうと  
とぞつけくま物語をうしてめくろねどふまづ  
とめこればまありくまふ秋事おかせん  
とてたりたりうへのまうせぬひてかこりき  
こえさせぬひてそのこども皆福よかきてもこ  
まとおかせらうよこそあをまうう何のい  
せらるるふらとおがえううとてのちふ袖は横

ある組をくくし  
うけては横ハ新形  
をいづてうおまれ  
バ袖は横といへる  
さうさく二云ふ  
てとちめいさ  
めとていさめ  
ととととと

みくしけどの中  
まのほ妹さうみ  
うげ友の下よの  
もどをいんは  
弘福云々

たどとりおきておひるなりぬあめり。か  
る年の二月二十五日ふま志きのほづうふ出  
させぬひしともふまふうで梅壺ふのころい  
うううの目お中ねのせうそとてまのあ乃  
癒ぐらまうまうでううふこひううのふ  
がれバだがぶおなんけくまうあけさんよ海  
りぬべうがならげいふべきありううた  
うせでまてとのたまへりううどつがねは福ハ  
たどてあるぞそふねよとてみくしげ殿め  
たまばまありぬひさく縁おきてぬりこれバ  
うらのみどらう人のたうせぬひしからうとて







うき世のいづつ  
さびきうきんハ今  
かしたあまうと  
ありこれより  
さびきハ女のさ  
うりさるるあり  
抄よりさびきども  
とあれど百葉集よ  
うりてともさびき  
まぶきうき夜よま  
ねくるとあれハ保  
しるけまハ  
まらき夜ハ蒙も着  
ぞあり

あつある今がー見不ありをうーかすぬべきよ  
いとさびきさびきふくぐーきん人の髪さども我よを  
あつぬぢね不さあまきちりぢひて大かさ  
ことさう比るれバあまのなきさうなる薄らびあ  
とひとつこえぬきぬどもなごあれバ露のそえも  
見えぬふぢさうまらねぢさきさうさきあふ  
てあつらることおぞこさひよりちをうけれさき  
へさんすあまことづけやあふいつのまあま  
どのあまさてもよぶゆもそささうれどもか  
ねてさひひてうバまつらんとて月のいみぢ  
うあつたよ西の京よりうらまよつぢねをた

うんとてハ倦て  
よて俗よホツキス  
ルキガツマルさど  
いふさうれどさ  
ハさびきあま

あまきーやどからうどてねぢびさう起出さうー  
うきさつらへのさーさささどかうりてさひ  
あまおげよこそおひうんどあーうぢどさるま  
ねをバねささるまどげよささあまんといとほ  
しつをさうーくもありささうあて出ぬひねと  
うりえんくハをうー内よいうさる人のあ  
んとあひぬぐーおくのうさうりえ出されうら  
んうーうこそさよさう人やおもえおふまどけ  
まらまらぬまきバあまありぬぢさうよんく多くつどひ  
あてお徳のよきあまきよさうおさどをぞさあ  
いひさるひささうー仲忠が事さどあれりもた

まらー抄よハさう  
ー仲忠とありさ



ハ、補どつめべき  
あはあは、こはき  
えめてすぢとわ  
しをうつしひぐの  
さちおん、さちハ  
さちはおれよええ  
さち、くのみさう。

ひるさひのよがま  
ありさうつるお云  
茶よ職よよあるし  
既中ねのおさひ  
し、さち、さちと  
よすあられしと  
ええさう。

りまざりし事なむ佐られけるまづこれハ、い  
うみとことつれ仲忠がさうハたひのあやしさ  
をせちよ佐らるぞさちハ、何うおきんやども  
天人おらるぞうりひきて、いとさちきんやうみ  
うどのほむとあやハえつるといつハ、仲忠がさ  
人と心を侍て、されどよさどつふよ、此事どもよ  
りハ、ひるさちのぶがさありしつるをえさう  
う、ハ、いかみめでまどハ、ましとこそおがゆれと  
佐らるふ、く、さち、まことお常よりも、何さま  
ほしうさどつふ、まづを事こそ、けいさんと思  
ひて、さめり侍りつるみ、お徳の事よまざりてと

西のまといふあ  
云々ハ、お中ねの  
連みゆりれ、おま  
たさうと悟りのひ  
しことあり。

白氏文集第四の樂  
府よ、西去蘇門幾多  
地と又えさう。

て有つる事をかとりきこせさせれば、誰もくえ  
つれど、いとかくぬひたる、糸汁めさやハ、見と  
ほしつるとして笑ふ、西の京といふ所のあれさう  
つる事、ちあともみ見る人あらま、かバとさん  
たがえつる、垣なども皆おぶれて、苔おひてさど  
語りつれば、寧おの君の、かさうのねハ、ありつや  
といらへたりつるを、いみどらめで、西のうさ  
都門をされること、いくさくの地ぞと、くらさどさ  
びよさつるさちど、が、が、さ、き、さ、で、い、ひ、こ  
そをうしうりし、さ、さ、さ、の、さ、さ、さ、殿上人  
どのらるも、おさうさ、さ、さ、さ、い、ひ、さ、さ、さ、い



かぢやきさへんさんぞ  
ハ俗よソムキオトナ  
シカラスるまじつあ  
まうておろをさよハ  
あぢい

宰相申ねハ奇信ハ  
まう  
つらうとハばかの  
聖字をよあやうく  
まハイヂワロクハ  
あまもあぢがふハ  
つこまびーハヨク

とあまり心よ引いりたろおがえもさなれバ  
さいもん人もみくろび又よるもひろもろ  
人をバ何ウハちりまどもかぢやきかへさんま  
こつむつまどくさどあらぬもさこそハ之ぬハ  
あまのうろさくもげよあれバ此ふびいでたろ  
和をバいづくともなべてよハ志うせび経房瀬  
政の君などむりぞちり給へる左末の尉則  
光がきて物徳さどさついでよきさのふも寧お  
申将殿のいもうとのありどころさうともさち  
ぬやうあぢとといみどうといぬびーよまよま  
らぬやー申志よあやふくよまひぬひー事さど

知テアルコラシラ  
スト云争フハ甚ッ  
イワクデアツタニ

めハ和布まろべー  
ちうげんハ中まろ  
おろよまきめあ  
ぬよまろ  
ふまろハかくま  
とまひるまろハ  
あうらんとんは  
ハふまろよま不益  
まろといハ文雄ハ  
あまろよま不  
といハ

いひまあまあぢがふいといまびーうこそ有  
くれがとく魚みぬべのりーみた申将のいとつ  
まなくまろは顔よておぬりーをこの君よこ  
だよ合せバ急みぬべのりーいびてだいまん  
けよよあやーきめは有ーをたごとりふとアて  
らひまぎらまろ志のバちうげんふあやーのく  
ひ物やと人もんろんろんれどかーろろまま  
よてなん申まろをありまー笑ひなまろりバふよ  
うぞろーまことおぬをめりとおぬりーろりー  
ををろーうこそまどかこれバぶろろみまきこえ  
給ひそまどいとづいひろ目比久ーく威ぬ夜の











さうして、抄の後た  
がへり。自分一々デ  
ハヒソカニとつみ  
まへ。  
うつが吹上おろし  
けほのうまにねば  
ありぬる中るも  
をよめ志をよとと  
めん。

まあれ一本あどれ  
り。おまふあどれ  
とあるハとろし。

りしきんいみどくめでたうしんとこそ思ひ  
たりしうあど。佐らまはるは返りまがしこまり  
れうしやて。まうしうい。ひのせりめでしと  
思ひ侍るざうしん。御初もまうしと。中まうしと  
めとハだやめし。覚どらん。とまん思ひぬ  
し。とゆえさせこれバ。うちぬりいみどく思ふべ  
めるなり。たがねもておせなるをばい。いで  
の登しさるぞ。只こよひのうちみ。葉のうを捨て  
まあれさうぞ。いみどくみくませぬしんと  
む。佐とあるとあま。まよるし。かうしよてだ  
ゆし。まうしと。いみどくとあるも。ま。命も

もさるざうし。捨まんとてまありみき。

雪の山 六十六段

まきのみざうし。みねし。まうし。西のひさ  
ふ。ふだんのほどきわうあるふ。佛をどかけなり。  
法師のあうし。こそさうなる事なれ。二日ごうり  
有て。えんのもと。おあやしきも。ね。あうし。痛そ  
の佛供のねろし。侍りなんといつ。バ。いかでまざ  
きふいと。しうふるを。何のつふ。あ。あうし。ま  
出て。えねを。老るる女。のほうし。ね。いみどくも  
け。さるかり。ぞうまの。つ。と。や。の。やう。よ。細く  
経。う。きを。扱。び。より。下。五。寸。を。の。り。ま。る。こ。ろ。も。と

美陸云。以下乞食尼  
の事と雪山の事と  
交錯して書くは華  
づくひ。いとくめで  
た。は。後。の。文章。草  
紙。中。の。最。と。づ。れ。  
る。も。此。心。を。つ。け  
て。見。る。べし。  
佛供ハぶくとよむ  
べし。業花の餅よ  
百粒のほちもぶく  
す。忍花をう云と  
あり。



こゑひきつくろひて  
いさ食の暮らさるは  
なり。

をみやうはつむけ  
しきまきく。暖やあ  
なちをのふ。

とりハ人の機嫌を  
もうけて抱こをふ  
そとちやもこハ  
浮ふさる。糸乳母

りやうふべうらん。同ドやうよまきけこるをさ  
てごるのさうまよてつひまりたり。あれハ何すい  
ふぞいハ。あひきつろひて。佛の法牙子よさ  
ぶらへバ。不とけのたろ。たべと申を。此はむら  
たちのを。み給ふといふ。さるやかよみやびか  
なり。かゝるもの。いうちらんどたるこそあれ  
をれ。うそも花やあまるかなとて。こと抱く  
とて。佛の法抱る。そのみくふ。いとたふとき  
事うるといふ。けしきを見て。なごかこと抱もこ  
べざらん。それのさづら。ねバこそとり申ゆれ  
といハ。だぐだものひろき。ちひなごを。む結み

集おたまのほやう  
み菊を多く種さ  
たひひて。おらまよ  
云よ。はるハ。ねと  
ねんこ。ハ。たう。  
ふあさ。り。よ。ら。ハ。を。  
一本。よ。ま。あ。ハ。と。あ  
り。い。づ。れ。う。よ。う。ら  
ん。

とりいきてとろせさるふむげみ中うくさうて。  
ふろづの事をうくる。さきく。せできて。男やあ  
る。いづこよか。さむね。だ。う。ふ。と。ふ。よ。さ。の。き  
事。そ。い。ご。と。さ。る。ど。と。れ。バ。う。こ。う。こ。ふ。や。舞。う。ど  
さ。る。か。と。と。ひ。も。を。て。ぬ。よ。よ。ら。い。た。ま。と。ね。ん。ひ  
だ。ち。の。も。け。と。ね。ん。ね。た。る。と。だ。も。う。こ。ま。が。さ  
え。い。と。ま。う。り。又。男。の。事。れ。も。み。ぢ。茶。さ。ぞ。名。を  
た。つ。く。と。が。ら。を。ま。ら。が。い。る。い。づ。く。み。く  
ふ。ま。バ。笑。ひ。よ。く。み。て。い。ね。く。と。い。ふ。も。い。と。さ。か  
し。これ。よ。何。と。う。せん。とい。ふ。を。き。か。せ。た。す。ひ。て。  
い。み。ど。う。さ。る。ど。か。か。と。も。う。い。た。さ。る。い。せ。と。せ

きうせのひてハ。皇  
后。の。き。う。せ。の。ひ  
なり。



とくやりてよハハ  
くいなまへーとの  
信ごとまり。

おれうハハのうを  
あさみ思ふをさう  
べし。おまハハ家  
とあり。

いづちやりみん  
ハハまきまを店  
らせのひきまぬ

つる。えこそきうで。耳をふくぎてありつぎその  
きぬ一つとせせてとくやりてよとおおせざら  
あまがとらて。それ給をらもるぞきぬもけ  
り。白くてきよとてるげとせられバ。あをを  
みく。肩まごうちうけてまふおれ。穢よみく  
皆入ま。のちみハハ。ひさる。つねみみえ  
まがひてありく。おがてひごちめをけとつけ  
たり。きぬもろあま。回ドもけ。けよてあまバ。い  
づちやりよけんまどよくむよ。右近の内侍の  
まありくるよ。か。ま色のぢんか。くらひつけて  
たき。あま。のう。つね。よ。く。る。こ。と。有。り。也

小島南とよみ人后  
宮よつうのる若き  
官女の名え。  
あれいうで見ゆ  
んハハの厄をえこ  
しとつふま。

一本きぬ一つの上  
お例の二字あり  
これよま。  
きれごうハハ。か  
そまねど。ままハ  
らる。とまら。  
志まほの十よ日よ  
りを美降。此章の  
一版とかりみある  
しをつけさう以下

うやど。ふき糸とつふく。てまねバ。せてきかせ  
たまへ。バ。あれい。う。ぐ。え。結。ん。み。せ。さ。を。た。ま  
へ。清。と。く。い。を。り。さ。う。ま。か。ら。ひ。と。ら。ド  
か。ど。ま。ふ。其。の。ち。あ。ま。を。う。こ。ま。の。い。と。あ。て  
や。あ。ま。の。出。きた。ま。を。ふ。び。出。て。もの。ま。ど。と  
ふ。よ。これ。ハ。ま。づ。か。げ。み。思。ひ。く。あ。ま。を。ま。れ。バ。  
きぬ一つ給をせまを。あ。を。お。む。ハ。され。ど。よ  
し。ま。て。ま。な。き。よ。ろ。こ。び。て。出。ぬ。る。を。ま。この。事  
陸の女。いきあひ。く。み。く。り。其。の。ち。いと。え。く。  
み。え。ね。ど。誰。う。ハ。思。ひ。い。で。ん。ま。て。志。ま。す。の。十。よ  
日。の。あ。ど。ま。雪。いと。た。う。り。ふ。り。を。女。房。ど。も



皆あまをば。

まづらひを后室職  
の大夫亮大進才進  
属などをつか  
所のちう八蔵人所  
の衆へくくくハ  
職原抄るどもより  
てまうべし。

ぢごして物のふこみいまつ。いとおやくおく  
をおちどくハ。夜よまことのみ心をつくらせ侍ら  
んとてさぶらひあしておほせごともていつた。  
あつかりてつくるよ。殿さ司め人よを。ほきよめ  
よちありたるも。皆よりていとさくつらり  
たす。宮づうささどありあつまりて。ことくそ  
へことみつくれば。おのちう三四人ありたる。  
殿守づかさの人も。二十人ぞかりよなりより。  
里わらさぶらひめいまつるも。さどす。今日秋  
ふつくろくよハ。ろく給をすづ。雲山よまら  
ぞん人よ。ちなるぞ。うづすと。めんをば。

うーみきしてハ。を  
侍を傷よして。退  
出せらる。

ふむと。もが。を。  
漢臣呂檀の考ふ  
ゆつて加へ。い  
うも。は。二。字。ま  
てハ。ふ。を。き。こ。え  
が。

らハ。ま。ま。い。つ。げ。ら。ら。い。ま。ご。ひ。ま。あ。ら。も。あ。り。里  
と。や。ま。い。え。つ。げ。や。ら。ざ。つ。つ。を。て。し。ま。ま。宮。づ  
う。さ。め。い。ま。ま。ぬ。に。ゆ。ひ。と。ら。せ。て。え。ん。よ。ま。げ。出  
る。を。ひ。と。つ。つ。ら。い。よ。の。り。で。を。ま。み。つ。つ。ら。い。よ  
さ。して。び。ま。あ。の。で。ぬ。う。へ。の。き。ぬ。る。ど。き。つ。ら。い。か  
つ。へ。ま。ま。で。将。衣。よ。て。ぞ。あ。ら。こ。ま。い。つ。ま。で。あ。り  
た。ん。と。ん。ま。の。こ。の。の。も。ら。る。も。十。余。日。ハ。あ。り。な  
ん。と。こ。の。地。ぢ。ら。の。の。ぢ。ど。を。あ。ら。か。ぎ。り。申。せ。ら。ら  
か。よ。と。と。い。せ。し。ま。つ。つ。む。目。の。十。五。日。す。で。さ。ぶ  
ら。ひ。た。ん。と。申。を。ほ。ち。も。え。さ。い。あ。ら。と。た。が  
と。め。り。女。房。な。ご。い。ま。づ。て。軍。の。内。づ。ご。も。り。申。あ。で



きくよのともむら  
くよのそごい一本ふ  
くよとあり。  
きやせの康賀王  
母集ふつみをきや  
さんうらとくらり  
とありやの洞と  
俗ふあきむ。

春宮ハ三條殿なり

もあらざるとのみ申さるにあまりとやくも申てけ  
るかるげよえしもさあらざらんづいたちな  
どぞゆべかりらるとさうよいあつどさづま  
おでやうといひそめてん事としてかこうあ  
がひつ三十日のほどふ雨などふまききゆべ  
もなうたげぞとさうねとちゆくさう山の  
観音さまきやせ給ふるといぬるも物ぐるほ  
しとて世山つくりさう日武部めぞうさうか  
は使よてまゐりたまはふとねさうい物など  
いふよ今日の雪山つくらせ給もぬるまなき  
は前のつがよもつくらせ給へり春宮三條殿よ

一番の美ゆきうん  
ゆりなまるとい  
ふべきをふりあけ  
るおといつとつと  
めてさ。

なまゆきまてあ  
されうらまてあみ  
まのまへまてあか  
こうゆきんまてあ  
さうまてあといひ  
てさる。

とつくらせ給へり京極殿もつくらせ給へり  
なごいづ。  
くよのめみめづとみる雪のふ。  
おころくふふりふくらかま。  
とかさるらるるくつていそまればたびくう  
ぶきてかつていえつかりまつりながさあび  
またりみまのまつよてくよをかこう侍らんと  
てたちよき哥いみどこのむときさうまあ  
ういふおよきこいあしていみどくよくとぞお  
ひつとんとおのたまをすつごもりがこよとて  
らちひさくさうやうるまど猶いとたさうて







抄ふみくうをこ  
るんとあるの  
宮一本よりさね  
ハ基盤するべし。

卯杖印杖大者ハ同  
トやううて物中  
うハねり東より  
寺ハ植之末まで  
うて借りうり物之  
と源氏物語抄ふん  
えう。

りぬまどたふとのごもりたまばもやよあさり  
たうみ格子をござんなどかきよせてひとりね  
んどてあくふいとたむかうらかたなればひ  
しめくふたどらうを給ひてまどをもちとの  
たまそすまば齋院より佛文のうぶららんよハ  
いかでういそぎあう侍らざんんと申そにぐま  
いととかりうりとしておきさせ給へり佛文あけ  
てせ給へまば五寸そのりまう卯杖二つを卯杖  
めさほまがうらつてみるごとてふらちをまひ  
かげふまげまうつらげふかづりて佛文ハ  
るうたづなるやうあらんやとてゆらんぞれ

毎院のゆかえいそ  
ひの杖のきハ杖を  
つく音と抄ふあ  
り。

内つうひふとん  
うふせトの張を  
くてこのてふを  
ハあうとよハ  
きやうるれどそ一  
つのいひさるる  
と美座の説あり。

ばうづちのがらつてみたるちひさき紙ふ。  
ふとよむそめひぎきをたづねまば。  
いとひのつゑのゆきとぞありらる。  
あかへるかさせ給ふぞといとめでたし。齋院  
よハこまよりきこえさせ給ふあかへしも。猶心  
ことふかきながらなくあういみえらる。あ  
つかひよ白きわり物のひとへもさうあるハ。梅  
をありか。雪のふりまきたるふかづきてまぬ  
るもをかうえゆ。此たびのゆ返事をあうまな  
りみこそ口さかりか。雪のふハあうとよ  
ここのよあうんとみえてきこえげもあうらる



さまであつる。一本  
ふさまいふこれど。  
とありこれより。

まめやうみ俗よオ  
モヒコソデヲルニ  
といふまゝなり。

こむりのホちうて  
おふいそれう如  
く庭あるをを守  
るとして門のきこま

くをりて見るかひもなきさよぞあつる。かちぬ  
るころちしていかで十五日もちつけせん  
ねんぢれど。七日をだふえさぐさどと猶いつバ  
いかでこきみをとんと。皆くあふ不どふ。穢よ三  
回うちいらせ給ふべ。いみどう口さく。此山  
れもてを志らざるりさん事と。すあやかよあふ  
ほどふくもげふゆうかりつるも給をさどい  
ふ。あまつりもおやせらる。同どく。いひあて  
あらんせさせんと思つるかひなけま。は物の  
奥をこびいみどうささごうきふあもせて。こも  
りといふも給くつ。いぢのやどにひさうさうて

どの小屋を造りて  
まむねなるまべし。  
めでこきろく。結  
構ある下。れ物あ  
らんとする。

みつるをえんのもと。近くよびよせて。此雪の山  
いみどくまもりて。わらさるどふふみちらさ  
せず。こぼさせで。十五日までさがるをせ。よくよ  
くまもりて。其日あつる。バめでさきろく。給を  
せん。とす。わさく。いみどきよろこび。いそ  
んる。どか。さうひて。老よだ。いもん。雨の人。びす。る  
どふ。こひて。くろく。きだ。おや。る。よ。や。と。いと。多く  
とら。せ。これ。バ。お。急。みて。いと。や。さ。き。こう。た。か  
み。や。む。り。侍。くん。ご。さ。も。べ。る。ど。ぞ。の。が。り。侍。くん  
とい。つ。び。そ。を。を。せい。て。き。い。ら。ん。も。給。い。こ  
との。由。を。や。せ。ま。ど。い。ひ。き。う。せ。て。いら。せ。給。ひ。ぬ







らんまねむハ屈  
マて思ヒムスボル  
ルまの抄の泥まの  
つり一本まのうん  
ドてとあり俵ドふ  
てキヲツカラスル  
まこいづれまも  
まこえたり。

やりつる物ひきまげてもやううせたりまけり  
とつふよつと遊まをううよみ出てくよも  
語りつるつとせんとうめきまんどつる哥もい  
とあさましくかひまくいあつるらんま  
のふさむのりありらん物をよの不どよまをね  
らんこもいひくんとれまこもりが申つるハ  
昨日いとろろうねるままで侍りまを給まを  
んと思ひつる物を給まをむなる事とまを  
うちて中侍りつるといひまをむ肉よりね侍  
せまとありてまを雪ハ今日までありつやまの  
たまひせたればいとねまを口まをけれまを幸也

あせませハ並子申  
上まをてまこえ  
まをつるまを

おろハ帽子まを  
まをつるまのつる  
まをぬりまをま  
まをまを

うらついたちまをだまあまをまをけつ  
ひ昨日の夕まをまを侍りまをまをけつ  
とまん思ひたままを今日まをまをまの事ま  
まん夜のねどまを人のまをまを侍り  
まやとまんねまをのり侍りまをまを給ま  
ときこえまをまを二十日まをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまを  
のまをひまをまをまをまをまをまを  
やうまをまをまをまをまをまをまを  
かり一事物のまをまをまをまをまを  
白き紙まを歌いみまをまをまをまを



本  
草  
卷  
二

夕きり一本お夜と  
ありられようし  
るべし。

手をとりてハ本  
守がそれいそ候  
まゆひてもとまひ  
らこしてこ。

物もありつとあ  
ハあやまり二本  
よりうてるお  
をおぎまひり。

事なご啓さればいみどく笑をせ給ふ所ある  
人にも笑ふよかう心よいつまで思ひけり事なご  
がへられば飛うらんまことよハ四日の夕きり  
さあつびどもやりてとりもてやせしぞがひり  
ごとよいひあてたりしこそをかひりしか  
翁おきそいみどく手をとりていひくれどにほ  
せごとぞかのよりきくらん人よかうきかをな  
さうバやおおごぶとせんといひく左近のつかさ  
の南のつひぢのめとふ皆とりとせて、りりいと言  
くて多くちんありつるといふなりしかバげふ  
二十日までもまらけつてようせむハ今年比福

うく二字一本ま  
しづれようし  
る二字ハ折る  
べし。おやくの人  
ありハなみくの人  
とんつるをさうか  
つらハ皇居も  
候よりとの夕きり  
皇もるみくもら  
まとのゆよいよ

雪ももふりそひます。うつりもまきこしめして  
いと思ひよりがたくあらがひたりと。殿上人な  
どももおおせられり。さてまかの哥をかえれ  
今ハわいひあらしつれ。同トゴことかちこ  
り。語まなど御ありものたまらせん。ふものこま  
へど。何せんよこのまじりの事をうけこまら  
たごの。けいし侍らんまめあやかよ。うく心ら  
かまおらうしもつらさせ給ひてまらこま事ハ  
ねわくの人もありと見つるを。これよぞあや  
くおひしるまど御せらるし。ふいとつらくら  
もなきぬづき心地ぞとまらで。あをれいみどき

九  
草  
氏  
卷  
二



枕草紙  
終  
卷二

いふるんきよもふる

世の中ぞか。後ふりつみう。雪をうね  
とねむひ。をそれい。あいな。とてかき。後よ  
どおほせ。ごと侍り。かと申せ。げよか。せ  
とねぼ。うもな。んとう。へも。笑を。せね。ま  
す。

標註枕草紙讀本卷二終



